謹賀新年
平成5年元旦

# 小松同窓会会報

第5号
発行
小松同窓会本部
〒923 小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
編集人　宮崎　榮

## 節目

校長　井口　哲郎

昭和三十四年、創立六十周年の年、私は小松高校に着任した。図書係が与えられ、竣工した記念図書館の整備に追われた。鍵札に残る自分の筆跡を見ると、なつかしく当時がしのばれる。

『六十年史』執筆分担も回ってきた。「小松市立高等女学校沿革史」である。執筆予定者が転勤したためのピンチヒッターだった。資料が乏しく、時間が限られていて苦心した。何とかまとめあげたものの「沿革史」としては誠に杜撰なもので、文末に「機会があれば再び書き返すための努力は惜しまないつもりではある」とつけ加えた。しかし、「機会」のないままに、その「努力」を怠っている。

創立七十周年には講堂が復元され、中学時代の儀式の雰囲気を思い出した。

その後、一時小松高校を離れたが、再び母校に戻った年が、創立八十周年に当っていた。記念事業は同窓会館新築。資料室の展示品は再び少年時代をよみがえらせてくれた。そして、九十周年、桜並木の修復――「青雲の小径」の造成があった。

こうして私は、創立記念の節目の年に、母校の教員として遭遇する幸運に恵まれた。同窓会は、小松高校生のために、次々と記念事業を計画、実行した。しかし、それはまるで私のためにしてもらったような思いがする。

同窓会の記念事業は、大正八年、二十周年の時に始る。それは「大中文庫」の設立であった。当時の生徒たちに敬慕された大島熙、中村速見両先生の頭字をとって名づけられ、校舎の一室があてられていたが、三十周年記念の時、青塗りのモダンな建物となって独立した。この記念図書館も、終戦後、音楽室になり、その後移築されて、現在は運動部室兼男子更衣室となっている。

大中文庫こそ、私の本格的？な読書の出発点となった。移築された時、窓枠にとりつけられていた串団子状の手すりがうち捨てられてあったのを見て、私は、その何本かをそっと同窓会館の資料室の片隅に寄せておいた。

この三年間、私は、地元の同窓会の会合はもとより、関東、関西、東海、金沢など、何度も各地の同窓会総会に出させていただいた。いつでも、どこでも、同窓生たちの母校に寄せる熱い思いを肌に感じた。それは、校長という立場にいる私にとって、大きなプレッシャーとなった。果して同窓生たちの期待を受け止められるような仕事が私にできるであろうかと。

私は、昨年還暦を迎えた。人生の節目にあって、私は、私自身に問いかけている。中学、高校、教員として延三十年余もお世話になった母校に、いったいどれだけ尽すことができたか、と。

## 初の名誉県民に

### 勝木保次氏（中学20回）

名誉県民は社会の発展、学術文化の振興に功績があり、県民が敬愛する人を選定し、称号を贈ろうとするものであり、平成四年六月、石川県議会で制度の制定が決まった。

石川県名誉県民選考委員会は、初の名誉県民に小松中学第二十回卒の生理学者、勝木保次氏、金沢出身の金属工芸家、蓮田修吾郎氏の二氏を選定した。十一月に贈呈式が行われた。

勝木保次氏は小松中学を卒業し昭和六年、東京帝国大学医学部を卒業。感覚生理学の世界的権威として知られ、東京医科歯科大学学長も勤め、四十八年に文化勲章、五十四年には勲一等瑞宝章を受賞。五十七年には小松市で、科学の分野の優れた人材に贈る「勝木賞」を創設。六十三年には小松市の名誉市民となった。神奈川県逗子市在住。

**小松同窓会**
**（テレホンカード・カラー）**
◎頒布価格
一枚八〇〇円
ご希望の方は、同窓会本部藤田まで申込んで下さい。

講演

# 出合い

陶芸家　徳田八十吉

私は高校の第四回の卒業生です。私の学生時代は学制がめまぐるしくかわり、全部で十一の名前の学校に通いました。旧制中学から新制高校に変わった時代です。私は現在五十九才になりますが、今までに沢山の素晴らしい先輩にお目にかかり教えられました。私なりにさまざまな経験もしました。そんな中からいくつかの話をしてみたいと思います。

私が高校に入りましたのは昭和二十一年、戦争に敗けた翌年です。今は共産主義が崩壊の道をたどっていますが、当時は誰も社会主義の本を読んでいました。私が影響を受けたのは河上肇の「資本論入門」です。そして赤旗をふっていました。家でも父に「職人を搾取している」などと抗議していました。そんな時、中学三年の九月、当時の担任の富田正一先生に礼法室へ呼ばれ話を聞かされました。先生は私に本当に富の平等分配はあるのだろうか、今はまだ中学生である。これからもっといろいろな本を読み、さまざまな経済理論を学ばねばならない。資本主義も変化していくであろう。大学を出てからでも運動家になるのは遅くはないといわれ、私は目が覚めました。その後の社会の動きをみていますとその通りで本当に良い先生にめぐりあったと思います。

私は趣味がいくつかあります。野球、卓球、百人一首、碁、ゴルフ、ボーリングなどいくつかありますが、そのときそのとき一つのことだけを熱中してやりました。それからその道の専門家を尊敬し、その道に強い人の指導を受けることです。弱い人を相手にしていたのでは上達しません。

私にとって一番大きなめぐりあいは祖父です。祖父には子供が五人いましたが、全部若くして死んでしまいました。私の父は養子です。その子が私です。私が焼き物をやろうと本心決めたのは二十四才のときです。それまではただ楽しければ良いと思って生きていました。しかし、好きなことをやっていても何か苦しい。そんな時、ある日、銭湯で、同級生のお父さんで下村さんが自分に話かけてくださいました。いろいろと話を聞き、私は自分を知ることができました。

二十四才のとき、山籠もりをしました。しかし、私はやはり人間であり、煩悩から、欲望から離れることは不可能であるとわかり、山から下りてきました。そして、今やっている仕事で本当に自分の作ったものは一つもないということに気がつきました。自分の技術はすべて人からもらったものである。自分のものは何もないと気付いたのです。

私はよく祖父に展覧会や陶器市につれていってもらいました。そして本物をみる目を養わせてもらったのです。色のことも祖父にならいました。みなさんも最初の出会いは肉親です。しかし、親のありがたさは四十才ぐらいにならないとわからないものです。

私は二十四才のとき人生の柱に焼き物を据えると決めました。中村憲一さんとの出会いも忘れられません。私の家で焼き物を焼かれたのですが、先生から、あなたは九谷が好きでないというが、それは九谷を新しくする素質をもっているからであるといわれ、九谷をものまねではなく、自分自身のものを作ろうと思いました。

私は祖父から色を、父から写生を学びましたが、何か心をきめて進めば、最後は何か型になるものだと思います。中村先生はまた芸術家は神が自然を作ったように人の力で新しい美なり真実を創造していくものである。世の中の法律とか道徳であるとかそんなものを全部否定する勇気がなかったら芸術家になれないといわれました。私は自分の作りたいものを作って生きる。それで充分です。

高村光太郎の弟、高村豊周先生にも会いました。先生から展覧会をめざして作ってはいけない。素直に作品に打ち込んでつくれと教えられました。また富本憲吉先生からものまねをせず、自分のものを作れと教えられました。富本先生から小さな皿に一つの点を描く場合でも、もうこれ以上動かせないというところまで吟味せよということを教えられました。

海外へ旅行したとき、日本人の常識とそれぞれの国の常識の違いについて考えさせられました。国によって、また、年令によって常識も違います。みなさんの人生はこれからです。さまざまな経験をつみ、素晴らしい人間に育っていってほしいと思います。

（十月二日、陶芸家、徳田八十吉氏を講師に迎えて、創立記念講演会が開催され、生徒に深い感銘を与えました。高校四回卒の氏は、この講演を機に作品「深厚燿彩黒綿文壺」を母校へ寄贈されました。九谷の伝統の色彩の美しさを現代的な造形に生かしたこの作品は、ニューヨークでの氏の個展にも出品され、絶賛を博した大作のひとつです。）

## 中学関東同窓会に
# 往年の美少年58名集う

小松中学関東同窓会の総会（旧制受験で入学の高校4回卒までが会員。毎年開催）は9月21日午後5時半、東京駅八重洲口前の国際観光ホテルに58名の会員が参集して開催された。

本年度幹事長の東剛民（41回）氏の挨拶に続き、本谷勇（46）幹事が経過報告で『中学の関東同窓会の発足は昭和30年代中頃と思っていたところ、母校の井口校長先生から「大正13年6月6日発行の学校誌〈白峰〉によると、大正12年5月12日に神田錦町松本亭で1～20回生21名が集って創立したことになっている」と教えられた』と報告し、最近の同窓会会報とともに、当時の学校誌のコピーが配られると、出席者一同、その創立者名簿に犬丸徹三（2）中谷宇吉郎（15）北村喜八（15）など錚々たる先輩の名前を見つけ、母校の歴史の重さに改めて感激した次第である。

物故者への黙禱の後、三森良二氏（21）から古き佳き時代と在りし日の偉大な諸先輩の様子などの紹介を合わせた乾杯の発声で宴は始まり、会場のあちこちで、杯を片手に同級、同郷、同好など先輩後輩入り混じっての懇談で、天守台と名物先生の話題などが飛び交っていた。

また、嶋崎均（37）亀洲迪（42）金田一郎（43）の諸氏からの回想やら檄やら活などを交えた話もマイクを通して拝聴することができた。

飲むほどに語るほどに、熟実壮全員が50年も70年も昔にタイムスリップし、最後は、足のケガを押して出席の山口操助氏（29）から差出されたツエを旗竿にして、赤地に白の桜の校章4本の横線を配した応援旗（戦前戦中戦後を通じて使われた。47回生会提供）を打ち振り「門出の歌」と「校歌」を放吟するという盛り上がりであった。

そして、後髪を引かれながら来年の再会を約して解散したのは9時近くであった。

（中学46回　本谷記）

## 東海小松同窓会

第2回総会が11月15日（日）午前11時より、名古屋駅前のホテルキャッスルプラザで開かれた。会長の西野英次郎氏の挨拶、同窓会長　仲井信雄氏、小松高校長　井口哲郎氏、石川県人会長　中村市次氏（旧職員）等来賓の祝辞があり、その後議事に移り、会務報告、会計報告、会則改正等を審議、役員改選を行った。議事終了後、懇談会に移った。参加者は60名であった。

## 近　況

高野　秀三

私は、昨年暮に猛烈な胃腸病にかかり、消化器の一部を切り取って漸く助かったのですが、その毒素の名前は判明していても当分の間は秘密です。

この名を公表すると社会的な問題となるからです。

私の入院して居た国立病院の院長は私の頭のレントゲン写真を見て、あなたの頭脳は頭蓋骨内一パイに詰って居て、殆んど隙間が無い。これは老人にしては稀であるから体を大切にして百才まで生きなさいよと言って呉れました。

これを真に受けて、これまで頑張って来たわけです。

そして今後全体に元気が回復したならば、再び従来の仕事に復帰したいと思っています。『前途に希望を持て』これが私の主義です。ご推察下さい。愛する我が後輩のために一言私意を述べてご挨拶といたします。

小松同窓会の方々の御健康と御活躍を祈ります。

（中学15回）

## ボートに熱中する

中山佐一郎

京都大学主催の全国ボート大会を目指して毎日猛練習。練習を終えると日の長い夏でも陽が落ちる頃で、夕焼けの空が赤色に輝いていた。雨の日はバック台で腹筋を鍛えた。初めは五分もがんばると翌日は腹の筋肉痛で笑っても腹にこたえたが、慣れると三十分も一時間も続けても平気だった。激しい練習で循環器が鍛えられ心臓が異状に肥大してしまった。現在でも医者はレントゲン写真を見て『若い頃、烈しい運動をしましたね』といわれる。また腹の筋肉が発達して、当時は裸になると盛り上った筋肉が得意だった。

何よりボート練習が第一で学習の方は予習も復習も全くしなかった。しかし夜は夏目漱石の『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』、また徳富蘆花の『思い出の記』などをくり返し読んだものだ。

卒業後の進学校など全く考えもしなかった。今になってあの頃、予習、復習だけでもしておけばよかったと思うこともあるが、ボートに熱中し

たことを少しも後悔していない。ボートは精神的にも身体的にも私を鍛えてくれた。もしボートをやらないで学習に励んでいたら、もっと別の道を歩いていたことだろう。或は軍人として出征し戦死していた公算が大きいのではなかろうか。宮本武蔵が『われ事において後悔せず』と言ったと吉川英治の小説に書かれているが、私も私の歩いた道を後悔していない。

現在八十三才の老人、残り少ない人生だが『一隅を照す人』になりたいというのが今の希望である。（中学24回）

## 原谷敬吾先生との出会い

埴生　知麿

◇――時は流れて――

昭和十年、石動に飲み水があって、小松の浜田町から、ここへ来て五十年を越えました。ここは倶利伽羅山の東麓、埴生の護国八幡宮。重文殿三棟などの管理を命ぜられております。国学院卒業後、岐阜を経て、大聖寺中学へ行ったり、真空地帯で重機関銃をいじったりして終戦となりました。

◇昭和五十八年には、測らずも原谷敬吾先生の御苦労に与（あずか）り、源平倶利伽羅合戦八百年祭【①神前奉告祭。②高野山座主導師のもとに、古戦場の現地で、「大遠忌怨親平等慰霊法要」を営んでの芳魂供養。③木曽義仲祈願の大銅像建立】の奉讃会名誉会長御就任を懇請（小矢部市長、松本正雄氏より）申し上げるなどして、浩恩に浴する結果となり、旧情を暖めもしました。

◇公務を退き、神主専業となり、餘暇を得て、宿志たる韓国教科書の翻訳出版を遂げ、反転して、北陸方言の語源究明に、国語史、音韻学、文法学等を借りて趣味の漫歩を試みています。

昭和五四、総督府編「朝鮮語読本」の対訳書出版。

昭和六三、「小矢部ことばの語源」執筆（市教委発行）。

昭和六三、「那訳・韓国『道徳』教科書」（上巻）出版。

平成三、「那訳・韓国『道徳』教科書」（下巻）出版。

平成五（予定）、「小松方言の語源」（執筆中）。

老耄は日と共に甚しく、餘力を傾けて本領を遂げたく思っています。（中学25回）

## 顧みて五十年

金田　一郎

昭和十六年四月に小松中学へ入学した私達第四十三回生は、その年の十二月八日に大東亞戦争の勃発を迎えた。そして終戦の年である昭和二十年の三月には、修学期間を一年短縮して四年生で卒業させられた。前半は、学生生活を楽しんだが、後半の一、二年間は、勤労動員で工場へ通う毎日であった。

中学卒業と同時に、海軍経理学校へ入学した私は、終戦の八月十五日まで約半年間、私の人生にとって貴重な軍隊生活を経験した。終戦後の半年間は、浪人生活であった。中学時代は、昭和風雲録やヒトラーのわが闘争など右翼ものを好んで読んだが、旧制四高時代は、マルクス、エンゲルスなどを乱読したことも、懐しい思い出であり、まさに時代の反映であろう。

祖父、祖母、父、母の四人とも教師であったから、文部省へ行くべきところ、間違って厚生省へ入ったと若い頃は冗談をいっていたが、歳月の流れは速いもので、八年前には、三十三年間の役人生活を退職した。大学受験のとき初めて東京へ住みついて、すでに四十年以上になる。妻は金沢出身、長男、長女、次男の結婚相手は、親がそれぞれ富山県、福井県、新潟県の出身で、何れも北陸に縁があるとは、偶然ではあるが珍しいと思う。

高齢化社会の到来は、間近かになり、平均寿命も伸びて、人生八十年時代となった。目下私は、長寿社会開発センターという団体で、高齢者の生きがい健康づくり運動の旗振り役をつとめている。その私が倒れては、世間にもうしわけないので、健康にだけは気をつけている毎日である。（中学43回）

## 四十六年昔のお礼を

田中　久次

昭和二十年三月、大阪、神戸には連日の様にアメリカのB29爆撃機が飛来し、グラマン艦載機の機銃掃射を学徒動員先の工場で体験していた。幸に山本校長先生の温情に依り、母の故郷小松市の本学に転入学の許可を頂いたのである。

昨日までの戦火の中と異なり、初めて見る小松中学校、それは本当に素晴らしい学校であった。明治建築の木造校舎、左には図書館、廊下を渡れば広い道場、天守台への桜並木、残雪校庭に浅く、校歴四十六年の風雪に耐えた風格が私の胸に迫り来る。感動は熱く、今もはっきり脳裏に焼き付いている。

農村出の師弟の多い中、環境の異なる都会育ちの疎開生徒は、正直に言って、お荷物な面も有ったでしょう。中谷先生（ばくだん先生）が「ダラ、わしも神戸からきたんや」と言って頂き、皆の中に同化し、校歌を斉唱した時、その旋律と歌詞は、さらに私の青春の鼓動を喚起してくれたの

でした。

〝ラ小松　ラ小松　ララララ　ララララ小松〟初めて耳にした。このメロディーのなんと明るい事であったろうか！

今、数々の名先輩をいただき、また後輩の方々も益々ご活躍なされ、ご同慶の至りですが、本校にお世話になった事を大切に、姉の孫達も、きっと、お世話になって欲しいと願っている今日この頃です。

ああ、旧制石川県立小松中学校、ありがとう。

（中学46回）

## 昔も今も

宮西すず子

女学校を卒業して六十年、泌々と長生き出来たことを感謝している日々であります。

職人の娘として生まれ、当時としては女学校は高い憧れでした。親の不承知を知りつつ女学校進学を志し勝手に入学したものでした。ポプラの木々に囲まれた校舎で、修学出来たことは本当に楽しく幸せな日々でした。

学校に家が近いので常に一番に登校し、校舎の窓を開けることは乙女心の小さな誇りでした。

入学当初の髪型は束髪で、長い髪をぐるぐる渦巻にし一糸乱さず整然としていたものです。現在の長髪を結びもせず、梳き流しの姿などは想像も出来ないことでした。

在学四年生の時、校則が変わり、校服はヘチマ衿からセーラー型に、髪型も束髪からお下げ（三つ編）になりました。

当時お茶目の私は、先生方にニックネームをつける事が得意で、新任の先生が赴任されると、その先生の特徴を当て可愛い名を選んで呼んだものです。やがて教師になりたいと考えたのは、地歴の授業に興味を覚え、将来は専門学校に進み、K先生やE先生にあやかりたいと夢みたからです。

毎年クラス会（さつき会）を行っていますが、四年間机を並べたものは、長い歳月の間で各々生活環境は変わりましたが、会えば昔の名前で呼び合い、和やかな雰囲気で、お互い睦み合うことが出来、喜び合っております。

然し最近は、一人、一人と名簿から消え、亡き人となる方も増えています。生き残っている私達は、一日一日を大切にし、少しでも社会のためボランティア活動に励みたいと希っています。

〝クラス会喜寿を迎えて

さつき咲く〟

（県女21回）

## 煩悩具足の晩秋に

高田富士子

加賀野の果の白山よ
波打騒ぐ北の海

＊　＊　＊

昭和の始め小学校へ入学前、兄（旧中27回高田伊真雄）が、よく唄っていたこの歌を旧中の校歌とは知らずすっかり覚えて一緒に唄っていたことを懐かしく思い出します。その兄も昨年八十二才の誕生日を前に世を去ってしまいました。

〝白むくげ

しぼみし夜半や兄逝きぬ〟

僧侶の兄が近年私の家へ来たとき木槿の花盛りで佛間の窓から伸び放題の木槿が真白の大輪をつけているのを見て自分も寺の境内に咲かせたいとのことで取り木して根付いたのですが其の木の花を見ぬうちに逝ってしまいました。

木槿は朝開花して夕べには倭む儚ない花ですが毎日毎日同じ花が咲いているかのように次々と咲き続けます。兄が亡くなった日も此の花の盛りで此の花と兄の面影が浮かびます。兄一人姉一人（県女21回）三人兄妹の末っ子で三十代に両親を亡くした私は兄を父のように思って来ました。

〝穂芒や

兄亡き里の遠のけり〟

私の住む西軽海町は萩や芒が其処彼処に揺れて煩悩具足の凡夫、秋の深まりと共に感傷に更る此の頃です。

俳句春秋

初凪や浜藻はくるむ櫻貝
如月や形見に細き銀ぎせる
春愁や総てのものに限りあり
大銀杏枝拂われて芽吹きけり
葛の花石組確と天守台
工房に諸佛の御目秋澄めり
京小春本山間口歩で計る
手をくれる人と霜夜の握手かな
衿建てて冬夕焼の坂下る

（県女26回）

## ねんりんピックに出場

宮崎恵都子

第5回全国健康福祉祭山梨大会（ねんりんピック）は人生80年時代を迎え高齢者が健康で生きがいをもてる様にと開催されるもので「健やかに、伸びやかに、晴れやかに」をテーマに10月31日快晴の富士山を見ながらの総合開会式には常陸宮ご夫妻をお迎えし武田信玄の鎧姿で聖火が点火され、三世代交流の甲斐路ミュージック、民俗芸能などすばらしく感激しました。11月1日～3日まで山梨県下16市町村でそれぞれの競技が開催され私の出場する三世代交流マラソン大会は、西湖青木ヶ原樹海周遊コース10キロで千六百三十六名が心地良い汗を流しました。

見わたすかぎりの青い空、湖は金色に輝き姫マスを釣る小舟が所々で黒いシルエットを落し山々は一面に紅葉して、遠くにうす紫色の美しい富士山を眺めながら完走しました。すばらしい思い出がいっぱい出来て幸せでした。

思えば7年前若い時から、スポーツにはまったく無縁だっ

た私は健康維持のため北陸体力科学研究所（ダイナミック）で先生方が私の体力にあった運動処方箋を作って下さってアドバイスを受けながら筋力トレーニング、ウォーキング、ジョキング、水泳と週2～3回続けて来ましたおかげで石川県女性高齢10キロランナーに選ばれました。

これからも定期診断を受け、走ることの楽しさ、喜びを長く続けられたらと思っています。

（県女31回）

## 一世紀を生き抜かれ

有光　豊子

「百寿の恩師を喜寿の生徒が祝う」この記事を新聞で見てYさんと兼六園下の「たなか」へ山崎校長先生をお訪ねしたのが、平成2年10月。会場で挨拶されている先生のお声を耳にして遠き日の学校の朝礼が浮かんできました。その張りある凛としたお声にタイムカプセルが弾けた思いでした。金沢中学校初代教頭に赴任された当時の様子を30分以上も語られ、とても百才の方とは信じられませんでした。

機会があり平成3年4月、友達3人で大門のお宅へお伺いしました。祝賀行事連続の御様子なのにお元気そのもので早速同窓会名簿を出されそこの赤線引の来訪日の記入等小松高女欄を克明に説明され、それを見ながら私の金沢再会時のお礼を申されたのには驚きました。

満97才で講演された記事の中に、公職の会合、講演依頼、海外旅行には進んで出られ、一寸遠方には自転車を使われるとあり、又呆け防止に新聞テレビは勿論努めて固い読書をするとあり、これは今も続けられています。又肉体と精神の健康は不二一体とされ、御自宅の四方ぐるりとお庭（一、八〇〇平方米）の植樹、剪定除草はすべて御自分のお手入の様で恰も小公園の如くでした。白寿に至ってからは少々膝具合悪く一人の外出は止められたとの事ですが、現在なお社会の動き、時勢の変転に強い関心と興味を持たれ直にペンを取られるお姿にかくてこそとお見受致しました。

一世紀を生き抜かれ、なお矍鑠（かくしゃく）として「日々是好日」の御生活。

私共32回生も本年いよいよ高齢者名簿に名を連ねる人が殆んどの様です。まだまだ長い30年先迄もこの御長寿の先生をお手本に、より充実した日々を心掛けて行きたいものです。

先生のこの素晴らしい人生に心からの拍手と、来る3月24日健やかに百三才のお誕生日をお迎えのよう切にお祈りして止みません。

（県女32回）

## 追想

今村　美雪

昭和九年小松市がまだ町の頃です。知人のすすめで東京の前田邸へ勤めないかとお話がありました。田舎者の私がと思いましたが写真と履歴書を送り父と一緒に駒場の御邸に参りました。お目見えと言って一週間いて帰り、通知があって今度は一人で上京しましたが、当時は十二時間もかかってやっと上野に着きました。

御邸は広くいろいろな役職の方々が百人余り勤めておられました。私も奥の一人として生活がはじまり、心配でしたが金沢の人が多く助かりました。候爵はじめ家族の方はお出かけが多く大変でした。年に一度の誕生会は上野の西洋軒が出張して候爵はじめ私共まで会食させて頂きました。夏は軽井沢、鎌倉の別荘へ行かれ、お共した事もあります。その後だんだんと非常時の時代となり十七年には陸軍中将利為公もボルネオに出征され戦死をされました。公邸は今は近代文学博物館となっているそうです。

前田様、酒井様が金沢へ墓参でお出かけのときは梅鉢会からご通知があり私も参上致します。今は余生をちぎり絵や週に一回、謡を習い一日一日を大切に過ごしています。

当時を偲び前田家の御安泰を祈り追想と致します。

（市女6回）

### 川柳

紺矢　肇

百年の松豪邸を小さくする

お土産の鉄砲孫に先ず撃たれ

平成に消えぬ昭和の音がある

（高校1回）

## 時代の流れ

作本　房江

懐かしい学舎を巣立って早くも四十三年の歳月が流れました。その頃は十年一昔と言われる様な時代だったと思います。石の上にも三年と言う言葉があります。その三と言うのは一つの節だと言われます。時代の流れとともに今では社会の情勢が変わり三年一昔になった様に思います。私達は学生時代、青春時代に戦争の苦しさと終戦の佗しさを経験して来ましただけに、尚時代の流れに敏感になるのだと思います。

現在は時代の流れと共に何から何迄が開発進歩して行き、私達は色々様々な事に出会い一年一年歳を重ねる度に、迷路の上に立たされて行く様な心地すらします。目で見て解からないものを耳で聞いて判る筈がないと笑われる自分の行動に、反省させられる事が多いと過す今静かにふと……過ぎ去った湾岸戦争の事を想い出し、早く終って良かったものの、長引けば長引く程いろいろな出来事が湧き起こり、今こうして居られただろうか

と悲惨な空想を描きながら時代の流れに流されて来ました。長いようで短い人生を想い出し、平然平凡に、世帯を持って暮す我が子、孫達を眺め苦しい中にも幸せを求め私達等も含めて、良い社会、時代がいつ迄も続く様にと祈って止みません。

（市女20回）

## ゲッツァン先生

山崎　行雄

ゲッツァンこと森原一二先生は、旧制中学の書道と剣道の教師である。

高校時代以降十数年先生の温顔はいつも私の身ぢかにあった。武専出の先生の戦後の剣道の弟子として可愛がってもらったからである。私の高校時代は剣道が解禁となってすぐだったから、戦後の剣道の揺藍時代。高校時代には先生や旧制中学の先輩たちにしごかれて国体や、高校総体にも出場できたのである。

時がながれて大阪に出てきたものの、地方出身の私に大阪の地はかの昔の武者修行、他流試合の連続と言ってよかった。はじめて出かけて、羽目板に突き倒されたことも再三、再四である。そんなとき師恩とも言うべきだろう、大阪でもトップの剣道範士が森原先生と知己であったことから、私もその大阪の先生の核の傘にいれてもらえることとなる。

先生が居合の長谷川英信流範士八段にご昇段されたご通知をいただいたのは、過ぐる二十年まえのこと。それは今も私の手元にあって亡き恩師、森原先生をしのぶよすがである。

だが、先生が私の結婚記念にと書いてくださった表札は、心ない人に持ち去られて今はもうない。

〝刀身へ殺到したる晩夏光〟

（高校9回）

### 俳句

## 葛の花

新田　祐久

葛の花弓張月をあげにけり
白山をおほふ青空曼珠沙華
ぶだう棚透いて光れる日本海
かけ取帳もてる狸や芋嵐
香聞いて白山見やる雁の頃

（高校4回）

## 助役に就任して

西村　徹

私こと、浅学非才の身にもかかわらず、このたび、北小松市長のご推薦をいただき、更に市議会の一致したご同意を得まして、十月六日付をもって小松市助役と云う大役に選任され参与する機会を与えていただきました。私にとりまして身に余る光栄であり、また感激の至りであります。

市政につきましては、全くの素人でありますが、今、小松市においては、小松空港の国際化、ＪＲ小松駅周辺の整備、旧市街地の活性化等々、当面している問題は複雑多岐にわたっております。その運営にあたっては、「キメ」の細かい処置が必要とされております。

これ等課題の一つ一つの克服に向けて、私なりに更に勉強し、市長のよき補佐役として、市長並びに市議会の意を体しまして、公正、公平を旨とし、より一層市政を向上させるよう、私の最善の努力を傾注する覚悟であります。

しかしながら、「言うは易く、行うは難し」といいますように、このことはすこぶる至難の業でありますが、職務に尽瘁いたし、市民の一層の幸を念じ、夢と希望のもてる「明るく、元気のでる町（市）」づくりに、微力ではありますが、全力を尽したいと決意を新たにしておりますので、なにとぞ諸先輩並びに同窓の皆様のご理解、ご指導、ご支援をお願いいたします。

（高校10回）

## コロンビアの生徒達

三津野真澄

私が青年海外協力隊員として二年間滞在したコロンビア共和国では、一部の裕福階級を除きほとんどの子供達は働きながら学校に通っていた。私が授業にでていたマリア・アウシリアドラ国立師範学校でも、ほとんどの生徒達は縫製工場や町の食堂で、あるいは洗濯や子守をして午後から夜まで働いていた。この学校はベネズエラ国境に近い地方都市ククタ市にあり、小学校（五年間の一応は義務教育）を卒業した子供達が入学してくる六年制の女子校であるが、授業は朝六時三十分から昼一時三十分までのみで午後はない。余りの暑さのために授業ができないからなのだが、オーブンの中に入れられたような焦熱の午後ふらりと入ったカフェテリア（とはいえ蠅が飛び交い、乞食が物乞いに集まってくるようなところだが）でテーブルの間をきびきびと立ち働いている教え子達によく会ったものだ。

その学校に赴任してまだ間もないある日のこと、生徒達が言ってきた。

「マスミ、私たち来週の日曜日にバザーをするから何か露店を出してよ。」

全校の生徒達がバザーを開き手作りの品物を売るのだという。そして得られる収益金は学校の電気・水道代や授業用プリントの紙代などに充てられるらしい。

「ええっ、そんなお金は国が払うんじゃないの？だって国立師範学校じゃないの。」

実は国の負担しているのは教員の給与だけで、それ以外の全ての学校運営費は生徒の納付金と市民からの寄付そしてこのバザー収入で賄っているのだった。

毎日働いていても学校納付金（月額百円程）が支払えず

に退学していく生徒は多く、無事卒業できるのは全体の三分の一くらいである。そんな生活の苦労と共に育った生徒達だから、他人を思いやる心は深い。毎週日曜の午前中はスラム街の子供達に文字を教え、長期休暇中は交代で盲目老人ホームにボランティア活動に出かけることをもう何年も続けている。さらにクリスマス前になると全校生徒は自分の使っていた人形やおもちゃを持ち寄り、貧困家庭を一軒一軒訪れて子供達に贈っている。こういったことが強制されるわけでなく自発的に行われているのだ。「貧しいと言われるコロンビアだけれど、なんて心は豊かなんだろう……」私は日本を思い出し言葉を失ってしまった。

さてバザーの当日、私はお好み焼きをピサ・ハポネッサ（日本風ピザ）として屋台を出したのだが、コロンビア人には珍しいのかこれが売れに売れてかなりの収益をあげた。そしてそのお金は校舎外壁用のペンキ代になったのである。

（高校31回）

マリア・アウシリアドラ国立師範学校の廃品回収風景

## 短歌

### 水の韻（ひびき）

永井　正子

夕つ日に伸びたる吾の影のなか潮ひたひたと小石を洗ふ

湯の底に揃へたる脚かすかなる水の韻を闇なかに聞く

かそかなる（かすかなる）吐息か漏らす夜の百合傍（かたわら）過ぐるに二輪のゆらぎ

（高校12回）

## 学校だより

◇小松高校では一年生の行事として「ホーム対抗討論会」を行っている。各クラスより五名の代表が出て、決められたテーマについて、相手クラスの代表と討論するのである。討論会は初め、各クラスが五分間ずつそのテーマについて基本主張を行い、その後四十分間にわたって自由に討論し、最後五分間でまとめの主張を展開するのである。審査員の十名も生徒が行い、討論内容をみて勝敗をきめる。テーマは「直接民主制が良いか、間接民主制がよいか」、「北陸新幹線は必要か必要でないか」、「自由貿易か、保護貿易か」、「原子力発電は是か非か」、「能力別クラスは是か非か」など討論会実行委員会で決め、各クラスはくじでどちらかの立場をきめ、クラス全員で主張の内容をまとめ討論会にのぞむのである。当日は選手以外の者も全員会場で傍聴し、その応援態度も採点の対象とされるので、クラスごとにまとまった整然とした応援がなされる。自分のクラスの選手にメモをして渡すことは許されるのである。一学期に一回戦、二学期準決勝、三学期に決勝戦が行われ、決勝戦は集会室で一年生全員が傍聴して行われ、このときは全員で討論内容を採点し集計し、一位のクラスをきめるのである。

日本で一番日照時間の少ない、降水量の多い、暗い北陸地方に生れ育ち、ともすれば内向的な性格になりやすい生徒達に自らの主張を沢山の聴衆の前で胸を張って堂々と述べることができるようにと考えての行事であり、二十数年も続いている。

## 本部だより

◇平成四年度小松同窓会総会が七月十七日にホテルサンルートで開かれました。午後七時に開会、仲井会長、井口学校長の挨拶のあと、議事に入り会務報告、決算報告、会計監査報告、予算案が審議され、会員の承認を得て総会終了、引き続き懇親会に入りました。清水道明氏（高校19回）の司会で和やかに会が進みました。出席者は中学65名、県女20名、市女2名、高校71名、学校18名の一七六名でした。最後に中学、県女、市女、高校と校歌を斉唱し、会を閉じました。

◇本年度の小松市文化賞は小松同窓会副会長、南愛子氏と同窓会報編集委員長の宮崎榮氏の二氏が受賞された。南氏は永年の児童・幼児教育の発展に尽くされたことに対して、宮崎氏は永年の社会教育や文化活動の振興に寄与されたことに対して授与されたものです。おめでとうございます。

## 第6号の原稿募集

◎〆切　本年5月30日
◎内容　自由（在学中の思い出、近況、体験、趣味、旅行記、文芸等）
◎長さ　六〇〇字以内
◎送先　同窓会本部会報係宛
◎発行　平成5年7月同窓会総会